

---

# 薄闇

完全なよそ者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薄闇

### 【Nコード】

N3787Q

### 【作者名】

完全なよそ者

### 【あらすじ】

ファンタジー的な内容にしたいと思っています。

はじまり？（前書き）

読んで頂けたら幸いです。

はじまり？

野稻宮藤子には最近になって新しい友達ができた。

この事が藤子にとって、どれだけ嬉しい出来事であったのだろうか。

その新しい友人と会う時にだけ、藤子の笑みを見ることができると言えば伝わりやすいだろうか。

今年で八つになる藤子は小学校からの帰りの途中であり、走っていた。

背負っている赤いランドセルは藤子の体の動きに合わせてバタバタガチャガチャと音を立てる。

水玉のワンピースは裾をひらめかせていた。

ずっと走っていたのか息は荒かった。

そして、見開かれた瞳は恐怖と涙のいりまじった色をしていた。

なにかから逃げているような姿に見えた。

その様子のまま藤子は彼女の家からは少しはずれた公園に辿り着いていた。

古びれた公園で、人はほとんどおらず、さびれた遊具だけがぼつぼつと置かれた寂しい場所だった。

藤子はこの公園の入り口の手前で足を止めた。

そして右手を胸の真中に当てて息を整える。

そして目をぎゅっと、強く瞑る。

藤子がそれをしたのは、楔に近いものだった。

彼女が抱えている日常の、汚れたものや醜いものを全て追い出す。

そして、綺麗な心を持ってこの公園に入りたい。

藤子はそんな願いを持っていた。

他人から見たら、薄汚れた公園だが、今の藤子にとってここはなによりも大事な場所だった。

息が落ち着いた後、藤子は歩きだした。

そして、運動をしていたのとは別の理由で、鼓動が高鳴った。それは激しい期待と、その期待の高さゆえに裏切られた時の失望を予感した心音だった。

藤子は恐る恐ると、公園の入り口から中を見渡した。硬い砂場には誰もいない。

塗装が所々はげているジャングルジムにもいなかった。

シーソーも無人だ。

鉄棒にもいない。

そして、2台のブランコの片方に、藤子と同じくらいの背格好の少女が揺られていた。

「このむちゃん！」

藤子は声を裏返らせてその少女の名前を呼んだ。

そして、嬉しさに顔をほころばせて駆け出した。

ブランコに乗っていた少女は、近づいてくる藤子に気づき、微笑で迎えた。

「今日は藤子ちゃん」

少女は澀みのない綺麗な声を出して答えた。

「うん！こんにちはこのむちゃん！」

藤子は先程まで見せていた表情とは別人のようになっていて、顔の筋肉の全てを頬に集めているのではないかと思えるような笑みを浮かべていた。

この少女こそが、最近になって出来た……藤子にとって唯一といっていい友達だった。

少女は九巳好と名乗っていた。

好は一目見たら忘れられないような容姿をしていた。

透き通った肌に弓上の細い眉、長いまつげに大きな瞳、すっと伸びた鼻に赤い小さな唇。

すべてが精巧なお人形さんのようであり、この世の者とは思えない美少女だった。

藤子が好と友人になったのは二週間程前のことになる。

その日も藤子はこの公園に来ていた。

学校の帰り道、どうしても家に帰る気の起きなかつた藤子は、ランドセルを背負つたまま沈んだ表情で、ずっと自分の足先を見ながらブランコで揺れていた。

藤子の心の中は負の感情で一杯だつた。

近い過去の記憶の中にある様々な出来事が頭の中をかけめぐり、その記憶が切り取られこれからの未来の全てにペーストされてしまふのではないかという妄想のような恐怖もあつた。

幼い藤子の心は磨り減つていた。

表情もなく、外部の出来事を拒否しているようにも見えた。

そこに現れたのが好だつた。

好みは優しい声音で藤子に話し掛けた。

その声は枯れた藤子の心に水を与えるものだつた。

藤子が顔を上げると、うつすらとはあるが優しみのある好の笑みが生かすところであつたのである。

それから二人は仲良しになつた。

好は藤子に同じ年だと言つた。藤子は好の事を学校で見たことがなかつたので不思議がつた。

そうしたら、好は少し家が離れているから別の学校なのよと答へた。

藤子はそれで納得した。

出会つた日以来、毎日欠かすことなく藤子はこの公園にやつてきていた。そしていつだつて好はいた。

二人は遊具で遊んだり、おしゃべりをして過ごした。

最も遊具を使って積極的に遊ぶのは藤子だけで、好はそんな藤子の姿を楽しそうに見守るのが常であつた。

「このむちゃん！みて！みて！」

好の隣のブランコに立つたまま乗つた藤子は、限界まで振り子運動のエネルギーを高めていた。

それをする藤子は楽しそうであつた。なぜならそれを見る好が楽

しそくに笑っているからだ。

藤子がこの公園で遊んでいる間は、いかに好を喜ばせるかということに一生懸命だった。

砂場では山の高さを毎日のように更新していき、腕を肩まで埋めてトンネルを開通させた。ジャングルジムではいかに速く一番上になれるかを見せた。鉄棒では逆上がりから前回り、コウモリの状態から体を前後に揺らした後にそのまま飛んで着地したりして見せた。ただ、シーソーは一人ではできなかつたし、好があまり積極的に動かなかつたのであまり楽しめはしなかつた。

どの遊具で遊んでいる時も藤子の表情は真剣そのもので、一区切りがつくと好の方を振り返るのだった。

そして、その時の好は決まって微笑んでおり、それを見た後に藤子も笑うのだった。

好の笑みが藤子の笑みでもあつた。

そんな楽しい時間はあつという間に過ぎていき、藤子が昨日の夜にテレビで見た内容を身振り手振りで大げさにそしてすっごく楽しんだよといいたげに好に伝えている時に、18時を告げるチャイムが鳴り響いていた。

「あ……」

救急車のサイレンのような音は、藤子から表情を一瞬で奪い去っていた。

それまでの元気な様子は消えてしまい、立ちすくんで俯いてしまっていた。

「もう……ろくじだね……」

元気なく藤子は言った。

「そうね。そろそろ帰らないと」

好は藤子を励ますように言った。

藤子は二度、頭を振ると努力をして笑みを作った。

「それじゃ！またあしたね！」

「うん。また明日ね」

藤子は公園に入った時と同じ入り口を使い、好は逆側から帰っていった。

楽しい時間は終わった。

夜中、野稲宮藤子は自分の部屋で布団を頭までかぶって丸くなっていた。

寒いわけではない。

夏に近い春といった季節であつて、布団に入っていれば寒さなんでものは感じるものではなかった。

だが、藤子の体は微かに震えていた。

それは、階下から聞こえてくる両親の声が原因だった。

「いいかげんに……。なにが……。不満……。そんなことを言つて……。あいつとはもう……。……。藤子はどう……。」

藤子の部屋まで大きな声が聞こえてくる。

「どうしろつて……。あなた……。いいわね！別ればいいんでしよう！もう……。こりこりよ！藤子を……。」

元々、仲が良いと言える両親ではなかった。

けれども、最近は特に酷く、毎日のように喧嘩をしていた。

今日などもまだましなほうで、父親に酒が入っていた日などは、それこそ目も当てられない状況になっていたのだった。

藤子は両親の不仲に心を痛めていた。

争いの声を聞きたびに頭が痛くなり、その中に自分の名前を見つけるのと心臓が悪い跳ね方をした。

耳を塞いでも階下の声を完全にシャットアウトすることはできなかった。

藤子の心は少しずつ磨り減っていった。

翌日、藤子が小学校に登校してみると、昨日までであった下履きが片方だけなかった。

それを見た瞬間にクラスメイトの仕業だということに気づいた。



藤子は苛められていた。

きつかけなんて些細なものである。

新しいクラスになったある日、藤子が持っていた手提げ袋が幼稚園と言つて騒ぎ出したのである。

藤子が使っていた手提げ袋にはお子様向けアニメキャラがプリントされていた。

小学2年生なのだから、そんな物を使つてもおかしくはなさそうなものだが、彼らの世界の中ではそれは少しだけ違つていて、それはもう少し下の子供が使うものとされていた。

大人から見たらほとんどわからない違いでも、子供達の世界の中ではそれは許されない事だった。

それを機に藤子はからかわれはじめた。

ここで別のもつと面白そうな出来事が起こり、そちらに話題が移ればそれも終わったのだらうがそうはならなかった。

普通の子達より少し整つた顔立ちをしていたことも災いしたのだらう。

男子はこぞつて藤子にちょっかいを出し始め、女子は陰口を叩き始め、明確に差をつけ始めた。

大人しい藤子はなにも文句を言うことはできなかつた。最初などは冗談でも聞くようにはにかみ笑いを浮かべたりもしていた。だけど、それは相手の行動をエスカレートさせる効果しかもたなかつた。園児という名が藤子には与えられていた。

幼稚園児の園児である。実に単純である。

意味もなく通り抜けざまに頭を叩く男子がいた。給食のいらない残りものを押し付けてくる女子もいた。話し掛けても無視されることがほとんどだった。よく消しゴムの欠片を投げられた。授業にも集中できず、先生に当てられても答えることができずに皆から笑われた。

弾力を失つたボールのように藤子はなにも反応を返さなくなっていた。

反応がなければ苛めがない。  
つついても相手が動かなければ面白くない。  
ならばもつと激しくつついてみればいい。

藤子が表情を失えば失うほどに回りのテンションは高まっていた。  
ていた。

そして、今朝は靴下のまま教室に入っていた。

だれも藤子のその様子を指摘したりはしない。

ただと確実に皆が意識して、遠巻きであれこれと言っている。

藤子にはその事が手にとるようにわかっていた。

だけど、なにも言わなかった。だれが隠したのかも興味がなかった。それを問いただしたとしても誰も相手にしてくれないことはわかっていた。

ただ、上履きが戻ってこなかったらどうしよう。その時はどこで買えばいいのだろうそしていくら出せば買えるのだろうか。それは自分のお小遣いの中で買えるものなのだろうかという事を考えていた。

藤子が小さくなって席に座っているとチャイムが鳴り、担任の女教師がやってきた。

女教師は出席をとり始めた。

藤子は吐き気と共にかすかな耳鳴りがしてきた。

自分が靴下のみ姿であることを指摘されるのがとても怖かった。先生はなにもしてくれない。それどころか事態を悪くすることにかけては天才的だった。

その事を藤子は見にしみて分かっていた。

橘君、田中さん、千葉君、津島さん、寺尾君……。

野稲宮藤子の”の”の順番が近づく。

……土佐中君、豊中さん……、野稲宮さん……、あら……。

藤子の肩が痙攣した。クラス全員のにやけた笑い顔が向けられる。

「あら野稲宮さん。その足はどうしたの？上履きはどうしたの？」  
女教師はどうしてそんな恥ずかしい格好をしてるのといったげに、

責めるような口調をした。

藤子は唾を飲み込み、顔を少し上下させながら答えようとした。用意していた答えは”忘れました”だったがそれを言うことはできなかった。

こちらを見ようとせず、口をぱくぱくとだけさせている藤子を見て、女教師は呆れたような嘆息をした。

「もういいわ。明日からはちゃんと履いてきなさいね」

西方君、西山さん、野原さん……。

藤子は両手を膝の上で固く握っていた。

苛められている事は誰にも相談することはできなかった。

両親はまず考えられない。もし、今の学校での出来事を相談なんかしたら、それをまた争いの種とすることは藤子にも予想ができたのである。

藤子は経験から、両親の喧嘩が自分という媒介を経由した場合、歯止めが利かなくなるということを理解していた。

元からあまり頼りにはできないと感じていた女教師も、両親に伝える可能性があることを考えると最初から相談できない。

同じ理由から近所に住む幼馴染などにもなにも言えなかった。

両親にも他の誰に対しても、苛めなんて起きていない事にしないといけなかったから、登校拒否をすることもできない、ただ耐えるしかなかった。

下校時、下駄箱を開けてみると朝にはなかった上履きがそこにはあった。

昨日までと違う所は、藤子の母が書いた野稲宮藤子という綺麗な文字を汚くサインペンで消した跡があり、その隣に歪んだ子供の文字で”園児”と書いてあった。

それを見た瞬間、藤子は頭からそつと血が抜けていき意識までもを失いそうになっていた。

それくらい憤っていた。

藤子は手提げ袋の中に上履きを詰め込むと、靴を地面に放り出し、

慌しく履くとそのまま全力で駆け出した。

藤子は泣いていた。その場で泣かなかったのは、この様子をクラスの誰かが除いていることを確信的に感じていたからである。こんな事をする事ができる人達を、なにも楽しませることはないと思っただからである。

無我夢中に走りつづけて、途中で躓いてこけてもすぐに立ち上がり足を動かした。膝から血は流れたがそれも気にならなかった。

気づいたらいつもの公園の前に来ていた。ずるずると鼻から出てくる汁をポケットティッシュを取り出して除去する。

涙はハンカチで拭った。

藤子は公園に入る前の楔をするために、その場でしゃがみ込み、両手で顔を覆った。

頭が痛かった。脳の中で小さな粒子が暴れまわっているかのようであった。

藤子はそれを抑えるために、まず体を落ち着けて、その意思が脳にまで伝わるのを待った。

ある程度の落ち着きを見せた藤子とはほとほと公園の入り口に向かった。

昨日は期待と不安に胸を膨らませていたが、今日の藤子は無心であった。

もし不安が的中してしまった時に、心が耐えられないであろう事を予感したからであろう。

九巳好は昨日と同じようにブランコで揺れていた。

藤子は手をぶんぶん振りながら好に駆け寄った。

「このみちゃん！」

藤子がやってくると、好は驚きの表情を浮かべた。

いつもとは違った反応に藤子はドキツとする。なにか悪いことをしたのかと自然に考えてしまう。

「藤子ちゃん。足……、血が出てるわよ」

「え……、あ、ほんとだ」

好が指摘した通り、藤子の両方の膝頭からはこけた拍子に出来た擦り傷から血が流れていた。

夢中で走りつづけていた藤子はその事に気づいてなかった。

「ご、ごめんなさい……」

藤子は顔を赤らめた。

「どうして謝るの？」

好みはブランコから降りながら不思議そうに聞いた。

「だって……、わたしはきたないから……」

藤子はスカートの裾を強く握った。

「そんなことないわ。藤子ちゃんはとっても綺麗よ」

「そんな……こと……ないよ」

泣き笑いのような表情を藤子はした。

好は藤子の傷をじっくりと見た。

「みたらダメだよ好ちゃん。……よごれてるから」

藤子は慌てて傷口を手で隠そうとした。

「触ったらダメ！」

藤子の動きを好が静止した。藤子は熱い物でも触ったように身を引いた。

「服に付いたら大変よ。とりあえず水で流しましょう」

「う……、うん」

「肩を貸すわ。水のみ場までいきましょ」

「え……、ダメだよ、そんなことしちゃ」

「ダメじゃないわ」

そう言うと、好はそつと片腕を藤子の脇の下から入れ込み背中に手を回して、自分の体に重みが乗るようにした。

「あ……」

藤子は戸惑うと同時に、安らかな気持ちを得た。そしてなぜだか、その瞬間から膝の傷が痛み出した。

「いたっ……」

「大丈夫？」

「うん、へいき。ありがとう」

「いいわ」

痛みを取り戻した藤子は急に歩くの事がおぼつかなくなり、両足をひきずりながら歩いた。

「私にすっかりと体重をかけても大丈夫だからね」

「……うん」

藤子は顔を赤らめながら好の言う通りにした。

公園の中央には水のみ場があり、上部に一つ、横に一つ蛇口がついていて、それぞれから水がでるようになっていた。

好は横についた蛇口の前に藤子をしゃがませて、水を流した。

「ん……」

傷口に水が当たると、藤子は顔をしかめた。

「もつとゆっくりにする？」

「うん。大丈夫」

傷口を水で洗い流した後に、好は藤子をベンチまで連れて行った。汚れていたので、藤子はハンカチを敷いてその上に座った。

「バンドエイド貼るね」

「もってるの？」

「うん。いつも持ってるから……」

そう言っただけは持っていた鞆からバンドエイドを取り出して、藤子の両膝に貼った。

「ありがとう……」

藤子は照れくさそうに言った。

「うん」

好は藤子の横にハンカチを敷いて同じように座った。

「そんなに怪我をしてくるなんて、とても急いで来たのね」

「ちよつとね」

藤子は沈んだ顔を見せた。この公園での出来事以外の事はあまり話したくはなかった。

「そっか……」

好もそれ以上は追求しなかった。

藤子は顔を上げて空を見た。

夕焼けに染まる空は綺麗だった。

彫りの深いコントラストを作る雲はとても雄大だった。

それに比べれば藤子はとてもちっぽけに思えた。

藤子はとても怖いような気持ちになってきていた。

学校の事、家の事。それらの事の全てから藤子は心を閉ざしていた。

それは彼女自身を守るためであった。

だが、好の自然な優しさと、目の前に広がる景色にやられてしまい、久方ぶりに藤子の心は開いていた。

そして、フラッシュバックのように記憶が蘇る。受け入れることを拒否していた過去の出来事の全てがぶり返してくる。

母親の皺のよったきつい眼差し、父親の怒声、クラスメイトの嘲笑……。それらが一度に蘇ってきた。

藤子は大声で泣き出した。

「ごめ……んな……さい……！ごめん……なさい……！」

「藤子ちゃん？」

好は驚きの声を上げた。

藤子は好の声にすがるかのようにして、好に抱きついていった。

「藤子ちゃん？」

好は同じ驚きの声を再び上げた。

声が届いていないのか、藤子はただ泣きじゃくるばかりであった。好は藤子が泣き止むまで抱きしめていた。

はじまり？（後書き）

ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3787q/>

---

薄闇

2011年1月28日09時20分発行